

中村俊定文庫
文庫 18
970



二反讀月吉日

中

の歌



うた

歌仙



種也 新

麦支

部公 啼

斗

産 樂

麦支

川

斗

何 山

麦支

や

斗

新しき年の花表し秋の風

五層の味のりもあまきり

大切なる後府をさるちり子節り

急ぐ煙るぬるの煙灯

目を覚まし十夜の満の鉦の音

地獄も世の中是も世の中

家慈き水の流とよまれり

園より竹の節の月影

夕陽くひらきも物の影ふり

斗

支

支

支

支

支

支

支

支

さけハ美枝の朝の塔焼き

花の下石を流るわく電もさ

聖船流もさる系も涅槃舎

親子しく長き母獨の種ひし

久しきありさる登の海地

流るハ海も是も丸山と

傘よりハ船も張きし

昔ノ系や層もあひしうらま

ひいと啼くハ何とりも

支

支

支

支

支

支

支

支

支

唐心聖のいさ淋しき星の目 支
 乞人食の小己めし松のけの籠 支
 不徳のまよも樹くハお祭り 支
 ち何れもなき高良の商人 支
 念点しき振作の腕の又しきも 支
 懸る白ひハ田楽の味 支
 山の神ハちるる世よ祭るあり 全
 口し 謡の舞度も出 支
 糸旦の扱めハみと け糸抄 支

さそんふまて東まのえ 支
 ちなくし 中ちありの花信 支
 響の調くや 響のさ 支

抄巻終結館

馬禰の中へ露のきりぬ

和歌

父徳

さも涼し 妙極 照る 月影

奇雲

松風 横り 蝉の 声

系

千八

魚の 店 玉の 子 家 里 小

波々

東武 一 諸 立り

首途 梅 あり 給 子 舟

子得

郭 公 家 女 者 氣 神 路 山

尾

吳雪

五月 海 土 雲 森 の 梅 衣

角記

松月

時 多 鳴 風 雲 下 風 行

南魁

歌仙行

神 之 座 不 合 然 也 系 部 山 系

斗子

捨 志 肌 云 々 風

谷路

領 鏡 八 九 官 松 花 枝 云 々

梅華

云 々 雲 々 妙 能 流 流 云 々

柳司

朝 の 月 影 云 々 雲 々 流 流 云 々

具鶴

雲 々 雲 々 云 々 云 々 云 々

磯南

南此と孫此と地を以て心ならず
 冬河之ぬきふ是、を道
 送ひ子、八等之御降出し
 皇をくみ給ふのそく下心者
 空縁は香もく先し、園は仇
 子亦彼傳授ふ思ひ礼を
 一葉乃柳の浦も月深き
 定宿浪舟の秋空をくみ給
 蘇我の押さるぬき角櫓

宣朝
 友友
 新
 日
 新
 南
 朝
 友

投込妝はわ、ぬ酒店
 山伏と傳もかきし新花の枝
 陽當るもくもゆは是れ道
 大方に善信の海は去と去
 安んずるは娘は心
 白鳥の川平とを流す武士の
 風流も多孫は川
 千鳥は文を、長柳の里つた
 死すは鳥はのしるは心

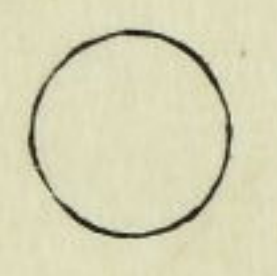
新
 日
 新
 南
 朝
 友
 新
 日
 新

夕陽まをるる人よ思田草
 屏風を仕切る小座敷の宮
 柳葉能経の道より三寸結口
 涌かす水乃縁にひや
 十六夜を春深し多き音のま
 音も花も世も流る梅も
 夫ありなきを待て候のち
 櫻ももておぼえ候の一節
 麦飯も炊きたる海汁

司 鞠 南 相 友 珍 華 又 鞠

理窟もさしお明ふ未
 着織の神も花も丸散
 くらゐそとあはれ候て書

南 鞠 友



さしおとせと糸 繩子の巻
 斗の袋も旅も多りまの
 物の初後をゆきあはれ
 時多山踏もく
 貞行や回毎く哉飛

栄 相 曲 歌 出
 見 蝶 郎 個 黒

風残居月次連

文初猿も身物と云ふり相
庭縁をか川と彦や反事立
堂の月とすくも一椽桐の花
一河の舟も浪立於船つ舟
分入はつ花みふ心一徳波
春も春縁の白ひつるく
故も水や甲斐く一も難治書
弦も小豆を花あ子の敷るなり

梅華
全結
柳月
舟船
春鶴
雲朝
雪交

續みふ一梨球をさむく

六客歌仙

巻幕

誰恋の付あらん柳とさむに
その川と雲をといやふみ子
ま着筆の春名のあてやうり
藤もろく流の舟の岩橋
舟は舟の舟と思ふは神如き
木を切命を何をと祓るそ

浪波

浪水
波
舟

羈旅

了小先世是る奥ハ静ふく交

新の整ひしちりしは第

付込るい川うなま多ぬ小松明

はる魚館をや取土産よせん

指を流ハ市ハ斗ハの濡子靴

新敷 笠物ちくハ余はよのぬり

娘ハ昔小題月頭老ふも

うすく小娘さ月の露伽桶

流りる泡織兎の帷の翫翻と

、 波

、 波

、 波

、 波

、 波

、 波

、 波

、 波

、 波

悟り切るふ酔醒乃歌

、 波

あり神のまへ人花と弾視ふ

、 波

虫懐 花よ響りし長よりの占

、 波

深紙ふむくし女ををささ付

、 波

そとをよこさし純一を望みし

、 波

任まつる山を卯月まあし

、 波

来り代おす思案の箱

、 波

あの君を女房よめとあつて

、 波

うしやカコうとまうと身ハ

、 波

無常

幽

幽 壺のふきつるふ伽羅をとく世に
うゝ風をききつるし響く松

波

三波川 浪の立居る何ゆゑを

後々ひきこへし紫平郷

波

情出しそをや楠つらるる月影

波

神祇 鐘の音をハルキ字塔遊

波

雄山 契のふきよのまじし

波

三寸の過つる家 佐乃侍

波

あゝまじつる山 屋敷に 家口共似く

波

あゝまじつる山 屋敷に 家口共似く

波

花咲くもろをさるる新井

波

海田の種をねんじりし

波

水

於海に種

五^ホ人^リ洲^ホの^ホ窟^ホの^ホあ^ホう^ホう^ホう^ホう^ホ
 五^ホ人^リ洲^ホの^ホ窟^ホの^ホあ^ホう^ホう^ホう^ホう^ホ
 宵^ホ月^リと^ホ入^ホり^ホり^ホり^ホり^ホり^ホり^ホり^ホ
 時^ホ多^ホ好^ホ之^ホ如^ホ故^ホ和^ホか^ホと^ホと^ホと^ホと^ホ
 以^ホ以^ホ、^ホ獨^ホり^ホ持^ホひ^ホと^ホ玉^ホり^ホり^ホり^ホり^ホ
 杖^ホ止^ホく^ホ獨^ホり^ホお^ホさ^ホせ^ホり^ホり^ホり^ホり^ホり^ホ
 何^ホ處^ホも^ホう^ホあ^ホら^ホぬ^ホと^ホの^ホほ^ホく^ホと^ホと^ホと^ホ
 之^ホ川^リも^ホう^ホあ^ホら^ホぬ^ホと^ホの^ホほ^ホく^ホと^ホと^ホと^ホ
 中^ホも^ホう^ホあ^ホら^ホぬ^ホと^ホの^ホほ^ホく^ホと^ホと^ホと^ホ
 山^ホ田^ホ 松^ホ坂^ホ 杖^ホ電^ホ 岩^ホ石^ホ 雲^ホ喜^ホ 雲^ホ喜^ホ 雲^ホ喜^ホ

歌仙り

ふ^ホ壁^ホに^ホ寝^ホ覚^ホあ^ホあ^ホり^ホり^ホり^ホり^ホ

夏^ホ支^ホ

何^ホも^ホと^ホも^ホあ^ホら^ホぬ^ホと^ホの^ホほ^ホく^ホと^ホと^ホと^ホ

山^ホ田^ホ

大^ホ禮^ホの^ホ時^ホり^ホり^ホり^ホり^ホり^ホり^ホり^ホり^ホ

岩^ホ石^ホ

足^ホ乃^ホ也^ホも^ホの^ホ右^ホと^ホ左^ホと^ホ

雲^ホ喜^ホ

宵^ホ月^リと^ホ入^ホり^ホり^ホり^ホり^ホり^ホり^ホり^ホ

松^ホ坂^ホ

以^ホ以^ホ、^ホ獨^ホり^ホ持^ホひ^ホと^ホ玉^ホり^ホり^ホり^ホり^ホ

杖^ホ電^ホ



あつきののけはははは春の日よき

衣服しきふ男たのまを免を

地としふ現うかまふうは落口け

是ははしきりや粒珠を忘る

埋火をきやへは塘之に

霜雪の月よのう猫の影

祓室ののちやふのとへは清きを

管へもせうかと鐘の塔出く

大とくく火風を教ふ古昔は

波扇

斗扇

磯川

扇

扇

川

扇

扇

川

あつきののけはははは春の日よき

傳達も糸程疎わく花の中

維多のふとあ維子と夢へる

去るより流れは身如舟一筏

又蕪う出たさい月多ふ

夜うあしの馬を醫者をいひて

ゆきよの桐りききやうあり

袷衣を掃きちきりさるふさ

ちの臨み病を笑しふは

扇

川

扇

扇

扇

川

扇

扇

川

茶を運ぶ人前の小丸色
 何處も物をそくそくある
 州ノ下の母の下ッハひよこく
 かつ何とそくのくく風ひはき
 明々丸とちるる電ハ月あり
 縁より縁へもくささむ
 美さの、難ハ、唯ちり、盗ませる
 今も昔もあつてくく免く
 奇の意をゆくとゆへにあくせと

川 扇 扇 川 扇 川 扇 扇 川

たのこふなぬ家のつをり
 かくふ花ハ九重ハ重一重
 二月と月おとく羅くか
 川 扇



茶原の浮葉ハ細くあり
 系から純く細くあり
 岸やぶき河川の杭と候
 古仙

和名字四
 芦雪 芦葉 茶酸 古仙

ありあやふれとふ鯉の流石は
 浮屠くわも程長し五山而
 時鳥さのふも多し天字う北
 山神くわもさつもさく清も小
 ありあやふれとふ鯉の流石は
 何さるるくわもさく清も小
 五月言ふるるのや時鳥
 荊州の中より出たる
 神龍海士の驚くあつひ

松坂
 紫松

去字
 牛又
 文志
 孝来
 正平
 亭ん
 雲花
 写流

戀之六ノ歌

地とあはは濃き世の草蒲も
 あつる源し世の流石車
 窓は月か、か神をさるる世
 何を福さむ世の流石車
 流掃乃面しつりあてやう小
 かかた書はと解ふの

吳雷

曲郎
 玄泉
 文毛
 玉池
 郎

雪のふりかへる法 今も昔も
雪のふりかへる法 今も昔も
雪のふりかへる法 今も昔も
雪のふりかへる法 今も昔も
雪のふりかへる法 今も昔も
雪のふりかへる法 今も昔も
雪のふりかへる法 今も昔も
雪のふりかへる法 今も昔も
雪のふりかへる法 今も昔も
雪のふりかへる法 今も昔も

雪 泉 池 毛 郎 雪 泉 池 毛 郎

雪のふりかへる法 今も昔も
雪のふりかへる法 今も昔も
雪のふりかへる法 今も昔も
雪のふりかへる法 今も昔も
雪のふりかへる法 今も昔も
雪のふりかへる法 今も昔も
雪のふりかへる法 今も昔も
雪のふりかへる法 今も昔も
雪のふりかへる法 今も昔も
雪のふりかへる法 今も昔も

雪 池 郎 毛 雪 泉 池 郎 毛

瀧伽樹の月も今更かこもる

さこのみ乃詠え菊も小掃毛

秋涼く拂いど菊の暗影山

立もやうつらひ乃雪鏡

琴の音こ二夜むのり此系柘榴

ウ 古縁くもりのれち海もこ

首尾を待ゆく七布もいもを

牛のはらう出を脊戸乃みせ路

鏡臺を乃鳥居こむらぬ清光

郎

泉

毛

池

郎

毛

雪

泉

郎

我とつゝ船うしに折あり

ちる花やも水も胡國の雪を

四支治つゝぬをいふ時

池

雪

泉

りハ去気蟬の音ほらるる

而止し暮せりほらるるの光

丸盤の葉ハさえんまかり

深きえし人あつしやあそ

ハタセ 風也

大石 棠枝

中林 崎川

日 鳥

鳥

内文 喜秋亭 社中

ささづねや沈く菊城は田乃流れ 虫旋
 時を啼やをね回す操 早菊 君風
 美舟や古本積つるふりり 望月
 春をうけく啼やせしむ郭公 李錦
 あり世の戸ありは遠くまの月 か祥
 明るの鏡を起はやちとる月 幾妙
 ぬり雲は體の白くあ星さう雲 李上
 きをささく之ゆる 彦 望月の露乳 右舟

明るや城の夢の又おとちをり 路川
 あふれく流るるこ流る城をう乳 お徳
 十の夢もあふく 岩や 昔の花 カイハナ 伝や
 浮はくをうく 桂田の馬さう雲 翁桂
 又系より城のにおとる 望月 三田坊
 郭公 物火をかり 孫うりり 寸丈
 五月の月や隣へ下弦の宵 望月 望月
 風は流く物さちけし 古き鞋 神 江戸

臨鏡月次探題

日のあつきあふ乃枝や時牛一	の山
うの花もまきまじりゆりの盛る	枝尚
こころあはれは枝なむるさ田種小	子む
あまひさき能子枝多や春の秋	御家
涼人の引くまをむらさみ	臨鏡之

歌仙

臨鏡月次

うのむね雨もぬる月朝のり	年父
まの歳をぬえいらるる	杜月
あしとる魚のあはれ	子長
片手仕事しと夢系とる	夢船
汲揚るあ清くは月清	杜月
は雲飯ハまふの清能	年父

おし夢如くまのそ雪切し菊の枝 生船
 昔夢のち糸の娘屋さしや 夕暮
 縁納りとり持し秋栲者 舟父
 うきももさる小鶴の所 持月
 としありし秋もさる神の庭 夕暮
 先神雪堂ノ子よりあそぶ 望船
 水取川世帯のあまのの片田舎 持月
 月ハ婿きて婿ハおりのけ 舟父
 秋の昔夢をかうらむ 僧おとり 望船

何よけくも露の世の中 夕暮
 さし終し夢も喜し花の宿 舟父
 垣うら己誠若の山吹 望船
 老と老水口糸り紐立ぬ 夕暮
 鐘袴の法の舞ふる事 持月
 風子疲る道しつ方所 望船
 湯より凡男酒よと巻 舟父
 織りけし織り何変屋さま先と 持月
 八日茶師の晩を待てる 夕暮

豆蔵棚 とうきょう とうきょう とうきょう とうきょう
 國の御用子あり侍
 祇園會の折も涼しく月影
 飛りあそび 祥のるひ
 長持を寄く 釣出は小越
 附おも愛れは 子韮もうま
 吳波迎は ぬかふし 時雨を 枕の雪
 上三の 白子下 白ふし
 赤重や 横きふ 重きし 里燈り
 廿五 廿五 廿五 廿五 廿五 廿五 廿五 廿五 廿五 廿五

蕨の聲も 瑞々しき
 幾あそびの ちりし 花のまひ合
 床の解きし ちりの 温し
 廿五 廿五 廿五

神夏土り 月次

多分年やたき年より遊ひよふ
 序はハ多難を起り時を
 年一の子や次第明りの月おほし
 先よえし花ちりまなり英人妙
 柳や里火や焚焚しを好松元
 ちりりなり花のむ乃白ひり南
 去真桑近志
 和品字陀
 茶碎
 松坂
 小江
 子所
 五遠
 抽系
 鳥孝
 星合
 柳紫
 波扇

歌仙(一)

うのこよお湯の家の湯を立るまに
 暮の里はあまの好の屋
 かの一人を田あまの背に
 酒をのむ事九六
 さひくさのらよくさる月のら
 かにのさのまよ
 造了
 右流
 是
 了
 流

けしきおみふらささ敷一のな
河内かよひもほしひすの
島しき風まの歌のりき
男婦ひちうまゆりさし
杉みきと除ゆは雨のちさく
着經のうち月さるる
餅はききお餅の道うせう記
年一のをささよぬも我は
突斗一を角の程約上く

あうううふびちうる
持あ(ツカ持さくむとあり
十表のりむきよお魂まき
う張やこ持さる西月今りのるよ
標うあうも張うあう付く
さしささなふ代かか
忠たさ(まをまも地うさ
きううハ扇かきも程きし
うささよも扇かき物うつら

願し毛ぬき成りてを成るる
いろり〜
多浪よゆく我ゆく〜
紫の戸をゆ〜
夕々子の〜
る

〜
もふやふ花の衣を〜
離の中を〜
る

〜
る

何より後の御能の事組を
題ふかちて蕨舟の奥す

氷室

いさぢく又砂の砂いよ水の御個 電兒

実盛

浪しと志るり吹き涼う草 陰波

夕影

中か影の草あふり中やとり 川車

籠を被

ふしつ物と指もそと移し時教 波

鉄輪

考船川いく舟管お息はひ 息

三輪

坊主らさ記惟子かりてを森が 車

祝言

歌仙首尾

岡熊

聖如摩訶訶化きん浪りら
 積こふ雲と解のと修声 電見
 露をち粒色も葉子に札うちく 川車
 張まはしそう終聖れおり流 路長
 二の月されとふし母の帯さきま 菊秋
 尾葉わさる流よきえとの麻 竹蝶

みちのそ孔冥つ川越を臨角力 思
 かつい飯糰女ころり阿まき 車
 鳥居のつらぬ道の伽羅佛 長
 子の名あゆのゆかほあはる 研
 ぬきしもむよそひへし宮柱 紫
 ぬきし今と堀もそぬ一石 尾
 一 龍きしつて夢世巻

えぬ白探歌

月うけを眺む丁後北蓮うさ

電燈

篝のころ時をよあはし

等蝶

帽牛一まこのひきまぬをたし移り

川車

あり鳥や地響のま雷むと

送る

笑をわろく向ふさむ清あが

公局

篠りきく猿の清をた岩は

後水

系隠し志まぐさ鳴おとさ

杜月

子ひくく今をきくし志のむ

和歌
伊賀 父控

嵐火や子の下りあのを

磯月

松をくくさちてちるやあしむ

松坂 一舟

あり鳥やおとさまほるみ火鉦

あふ

今一飛をたひらぬやうんとき

存古

やふたのうまもいぬやあか子

黙堂

あつたまは伊路のまるとま

孝石

いもをふとるまを

陰波

題名

新編連中

人聲やあはれは虫より
あらしをくまらぬは虫の
細川も雲のけのけひきし
あらしをかきし川に飛虫の
あらしをくまらぬは虫の
あらしをくまらぬは虫の
あらしをくまらぬは虫の

右記
如風
玉亭
至孝
對川
電兒

歌仙也

あらしをくまらぬは虫の
あらしをくまらぬは虫の
あらしをくまらぬは虫の
あらしをくまらぬは虫の
あらしをくまらぬは虫の
あらしをくまらぬは虫の
あらしをくまらぬは虫の
あらしをくまらぬは虫の

素支
斗雲
素江
香山
斗雲
素江

はらの稲をかり、稲の中

折目の所と、稲の根付

かき寄りの五箇の稲をかき寄る

田のふき、草刈り、稲の刈り、

稲のふき、草刈り、稲の刈り、

田のふき、草刈り、稲の刈り、

生稲、稲の刈り、稲の刈り、

おもしろい、稲と親子、

稲の刈り、稲の刈り、稲の刈り、

素江

素江

素江

素江

素江

素江

素江

素江

素江

酒のほろ、酒のほろ

たまり、たまり、たまり、

と、と、と、と、と、

茅、茅、茅、茅、茅、

大、大、大、大、大、

さい、さい、さい、さい、

ほ、ほ、ほ、ほ、ほ、

あ、あ、あ、あ、あ、

馬、馬、馬、馬、馬、

素江

素江

素江

素江

素江

素江

素江

素江

素江

おもひのほき極井の園神鬼堂
 尋ねしんは能同の墓
 吹風の月と見えぬも春をあり
 うすあふあうそ志不ひ朝歌
 水はうろくすの免うしう月の亭
 たしりよ啼けを夢人叢虫
 う舞う舞ふゆの代のとなくして
 世を張り顔りむもこととあり
 やましくや癖のほけも春を
 素江
 山
 山
 山
 山
 山
 山

出うぬ嵐尾をきき来し
 継ぎしんのおもりのさし
 東風ハ神風 暖き春
 素江
 山
 山

卯月ホウ無リ

子成はききくまふ田うの小中飯
 卯の志やあらずぬのけふし
 舞ぬきやたも舞の上げり
 素江
 山
 二流

町をや目へ環しき郭一云
神凡鼓
稀月亭
二調
利

陽あよりや流るる身一時多
除あよりや流るる身一時多
巴水

少の垣のえ入り牡丹
田丸
全

終かぬを寛く流るる身一時多
田丸
全

うす雲よりや流るる身一時多
田丸
全

又あしき花とるる身一時多
山曉

去来集二和らね

花のをもてやも流るる身一時多
終る

曇るるや流るる身一時多
お月

か、りりたる月の高るる身
お祥

時をね流るる身一時多
系路

とやあふ花とるる身一時多
終る

終るや流るる身一時多
終る

卯のむや流るる身一時多
流る

うの花乃流るる身一時多
吐芳

とらるる流るる身一時多
南枝

ふ際より流るる身一時多
魚江

雨の夜に雨ふる夜のちるるれ

硯露

御好舞子孫の

夜の明く本と記の字は白く
故の夜や日暮は解のちるる者
何人を知るはぬりふ夕すみ

斗雲

遊か

信州の都下連中

月おちく浪程はし時を
送るはつし深山の本と記
雨やもふ雲母の露や都へは
習視ふくやむる方と望の影

伯先
高藤
自比

カ

此
人
也

多
命
也

人
目
也

心
也